

# 現代における倫理の基本問題

松 屏 繁 麿

## (1) 緒 言

近時日本では、道徳教育の必要が教育界のみならず一般世間においても主張されている。これはたしかに理由のあることである。戦争と敗戦が招来したところの精神的空白、正邪善悪を区別する規準の喪失、民主主義憲法下における自由と放恣との混同、家族制度の廃止によって生ずる種々の誤解、等教えれば限りのない病理的現象が戦後のわが国における道徳的退廃と混乱となって現われている。それは具体的には少年犯罪の増加、不道徳な出版物の氾濫、その他限りなく多くの悪性を現わしている。このような現象は単に経済的窮乏のみによってもたらされたものだとはいきれない。それは経済的狀態がよほど好転した今日においてもなおそれらの現象は容易に跡を絶たないからである。それは単に終戦後の直接的な現象のみではなくて、それはもっと深いところに根ざしているのである。即ち、それは明治期以後の道徳の混乱の中から尾を引いていると思われる。特に社会道徳の欠如はわが国に顕著な事実であった。このような状況の中に敗戦という驚くべき最初の体験に直面したのであるから戦後の道徳的混乱はまことに深刻なものがある。ここにおいて道徳再建とか、或いは、新建とかいう形においてその振興論が出るのも一応の理はあると思う。これに対して道徳または道徳教育の反対論が一方においてやかましく論ぜられていることも事実である。その反対論にはいろいろあると思うが、一つは道徳教育有害論、二つは道徳教育無用論、三つは道徳教育軽視論、四つは道徳教育不可能論と数えられる。

このようにして現代日本においては、道徳教育をめぐる必要論と反対論との対立を現わしている。これをどのように今後解決統一してゆくべきか。正に現下の問題である。

この道徳教育の問題を論じようとするれば当然その前提に道徳とか倫理とかいうものの問題即ち、道徳とか倫理とかいうものは如何なるものであるか、その本質は何であるか、従って又、それに対してわれわれは如何様な把握をするか、如何様な態度で臨むか、の問題が考えられねばならない。このようにして道徳とか倫理とかいうものに対するわれわれの把握とか態度をどのように決定すればよいのか、問題はなかなか容易ではない。然しよく考えてみれば、この問題はわれわれ日本だけの問題ではなくてすでに世界史的な問題であることは事実である。いわば世界共通の道徳的退廃の中におけるわれわれの問題なのである。一体それはどのようなことであろうか。

## (2) 現代の世界史的状況

近代の道徳的世界観は十八世紀の啓蒙主義の最後の完成者であるカントによって深く固められて完成した。彼は道徳の根本は一般的な公益性という点に存するのではなくて、人

間の純粋な内面的な必然性から生じてそれが自己目的として意識されるところのみ倫理の根源性が存するとした。従って彼によって道徳律は自然的な感性的世界を超えた永遠不動の理性的意志の原理として確立され把握された。その後一方においては近代の資本主義的社会機構がいろいろの矛盾を現わし始め、他方においては思想史的にはヘーゲルの観念的哲学体系もやがて解体して以来、この近代的合理主義の最後の代表者であるとみられるヘーゲルへの対決において、生命哲学、実存哲学、唯物史観の三者が出現して来たのである。従って、これらの新しい思想は近代的な合理主義では到底解明し尽すことの出来ない非合理的なものを表面に持ち出して来るのである。そしてそれを強調する。然し同じく新しい思想といっても、それらの中においては、唯物史観は科学的合理主義を特徴的に主張するし、生命哲学とか実存主義はあくまで非合理性を主張して両者は決して同一歩調をとるとはいえない。両者は明らかに対立するのである。このようにして現代においては、合理を志向する合理への道と、非合理を志向する非合理への道との二つの方向が互いに分裂して対立しているのである。この対立の中に現代の歴史的特性を現わしていると思ふべきであろう。

実はこの二つの世界観の対立が道徳とか倫理とかいうものとの問題と関係して来るのである。一体それはどういうことであろうか。

この相対立する二つの世界観即ち、現代において厳しく対立している唯物史観の立場と生命哲学を含んでの実存主義の立場との両方共、実は根本から道徳というものを信頼しておらない、従って道徳の再建とか創造とかに対して誠に冷淡な態度をとるものであって、決して今日の危機を打開する期待を道徳にかけておらないのである。彼等はすべて、倫理が時代の危機を救済する力をもっているとは少しも考えない。そのことは彼等をしてすべて、倫理以外の道を選ばさせる結果となって来るのである。実存主義は人間の現在の根源的な不安と絶望を説いてそれから救われるためには宗教への道を選ばねばならないとするが、しかしそれでもなお救われぬとする不安は結局は自己への沈潜に向い、神は自己において在ると考えて自己決断に於て問題解決をしようとするのである。このことは人間の無軌道振りを發揮することに声援を送っているとも考えられている。又唯物史観の立場は階級意識の中に立って旧道徳を支配階級の搾取手段と見なし、それを克服する手段として敢て革命をも辞さないのである。このようにしてこの対立する二つの思想は共に道徳というものを弁護しないのである。一体その理由はどこにあるのであろうか。それはとりも直さず近代資本主義社会のもたらした現代の機械文明の中に存するのである。その社会は説明するまでもなく人間を非人間に化し、又「群衆の時代」を現わして個性の無視を敢てしているのである。戦争は科学技術や機械文明を進歩させ、科学万能の精神を生み出す。科学的には同じ方向を進むものが政治的には、いわゆる「二つの世界」の対立を現わす。この二つの世界の対立は又機械文明を拡大し、人間の善意を無視して平和への不安を将来し単なるヒューマニズムでは解決のつかない様相を現出する。

従って人間にとって残るものは不安と絶望だけとなるのである。この不安と絶望を何とかして克服せねばならないのであるが、そのためには人間性の尊厳を呼び起すのであるが、その方法は実存主義の立場においては機械文明を否定し、唯物史観の立場においてはそれを肯定する。勿論その肯定する場合には新しい社会主義的社会における科学文明の進

歩は却って人間性を回復して社会全体の幸福を招来すると考えるのである。このようにして人間性の回復においては、唯物史観は集団の社会性の方に偏し、実存主義は個人の個人性に偏して現実逃避的となるのである。一般に倫理とか道徳とかいうものは、人間が人間として真実に生きる道を意味すると考えられ、また人間は個人的存在であると共に社会的存在であると考えられて来たのである。しかし現在の思想においては個人と社会とは完全に分離し、個人として自己を徹底的に生きることと社会に誠実であることはなかなか両立し難い矛盾に陥っているのである。われわれは現代における危機の根本的な原因としての機械文明の問題を考えて行かねばならないと思う。

### (3) 教育の反省

教育は歴史的課題を解決してゆく人間の育成を目的とするが、その人間とは世界史的使命をになっている人格者である。この使用遂行のために人間は理性と自由を与えられており、それによって世界史的使命を果すのである。このような人間を育成する教育はその本質において倫理的である。人間のすべての生活は倫理的価値の評価に服しなければならない。そうして人間はその倫理性において不断に向上発展せねばならない。教育の主たる使命とするところは、人間の中に存在する倫理性即ち、自然法的意識を発展せしめることに存する。従ってあらゆる教育的活動は、この目的に向って集中されなければならない。今西洋における教育について重点的考察を加えたいと思う。

教育上における自然主義は十七世紀におけるコメニウスにその源を発し、ジョン・ロックにおいてその後発展せしめられ、更にこれを完成したと見られる者はルソーである。彼が「エミール」の冒頭に言った「万物はすべて自然の造物主の手から出る時は善であるが、人間の手に移されるとすべて悪くなってしまった」という有名な言葉は彼の根本的立場である「自然に帰れ」という自然主義の思想となるのである。かくて教育の本質は人間自然の本性を保持し、社会的権威やその他如何なる外面的影響からも独立して、子供は自己自身の有する自然の本性に従って発展するように指導することであると考えて教育上における発展主義の基礎を確立したのである。かくて教育において革命的なものとして世界の教育界に大きな影響を及ぼしたのである。ルソーの思想から大きな影響を受けて教育実践の道を行んだ巨人は何といってもペスタロッチである。彼は社会改革家を志した生涯から一転して初等教育の確立に一身を捧げるようになった根本の動機が嬰兒殺し少女の保護教育の問題とシュタンツ孤児院の不良児教育に在ったことは興味深いことである。その故は彼によれば社会改革による幸福の問題はその根本において教育による幸福の問題を先づ考えねばならぬとして教育に身を投じて八十年の苦難の途を進んだのである。彼によれば不徳の由って起る根源は人間心情の硬化にあるとなし、それは遠く幼少時の家庭における母心と子心の愛の結合による教育の不足と冷たい雰囲気起因するとし、絶望の淵に沈んで行けば心の内奥に潜む人間性の最後の感じが消滅し、神を信ずる最後の拠り所もなくなれば少女は嬰兒殺しも敢てするようになると思ったのである。

かくて人間的な心性がゆがめられ、硬化する時、悪は発生するのである。人間は心情の硬化を避け、刑罰と威嚇の方法は何等悪徳の根絶に役立たずと自覚し、愛による情操の純化はここに愛と信頼と感謝と従順の心呼び起す。かくて人間墮落の根本は心情の硬化に

在りとなし、それを救済することの出来る根源の力は深い理解と愛情であり、それはほかならぬキリストの啓示した愛の宗教に在るというのである。人類が有つ普遍的な内的敏感性と善良性とを正しく洞察したペスタロッチーに依れば教育の究極目的は、社会の一員としての人間を完成し、その向上を計り、人類の幸福を増進することに在るが、そのためには児童の有する天賦の諸能力の調和的發展を計ることが必要であるとなし、そのためには自発活動性を基礎とし、合自然的發展を通して児童の本来有する自然的本性を完うするようにせねばならないと考えたのである。ここにルソーの自然主義と發展主義の流れを読むことが出来る。

ペスタロッチーは人間の諸力の調和的發展を説くが、この人間性の調和的發展において最も重要な位置を占めるものは心情の教育即ち、宗教道徳の教育である。人間の宗教意識の本質をなすものは彼に従えば愛と信頼と感謝と従順との感情であり、この心の芽生えは幼き者とその母との労作社会における関係より生じて来るとする。彼にとっては「母は神の代理者である」と見る。かくて母を通じて神へと高まる宗教の基礎教育論は近世教育史上において確立された。母を通じて神に導くこの基礎教育はそのまま道徳の基礎教育にもなるのである。ペスタロッチーに於ては宗教の教育と道徳の教育とは常に内的統一の関係を有するのである。宗教道徳の基礎教育が主として母と子との狭き範囲における自然の關係を通して行われるのであるが、これがそのまま人類愛への道を自己に含むのである。以上述べるところによってペスタロッチーの意図が那邊に在るかは自ら明らかであろう。

ペスタロッチーの次に出て来たフレーベルも亦近世教育史を飾る一人であるが、彼にあっては人間性に対する信頼が余りにも大であつたが故に彼は児童神性論を唱えた。教育の目的は人間の中における神性を開発して永遠の完全なる生命に向わしめることである。この神聖なる統一性に従い、各個人がその内面から永遠の法則に従つて發展する。而もその發展の方法は児童天賦の自己活動を基礎とすべきであるとする故、彼も亦その根本的立場において、ルソーに発する自然主義、發展主義の教育思想を展開しているのである。

一体教育とは何かという問題に対して古来いろいろと考えられている。古代教育においても中世教育においてもいろいろ教育の目的は考えられているが、要するにそれは人間を人間にまでする働きであり、生れたままの自然的な人間を育成して真実の人間たらしめること、即ち人間の本性を完全に發揮せしめることを意味する。人間の本性を發揮してこれを真の人間たらしめるということはヒューマンイズムの立場であり、ヒューマンイズムの教育観は教育における普遍的原理を与えるものと思われる。この立場はギリシヤ的世界観であるが、歴史の中においては幾多の変遷を経ているが、然しその変遷の根底に一貫して流れて来た教育思想の骨子となるものがヒューマンイズムの教育観である。それが近世においてコメニウスを源流として誠に鮮やかに發展したことは先に考察した通りである。

戦後の教育は国家主義は民主主義となり、人類普遍の原理に立脚して自由な人格の完成を目ざして行われるようになった。然し現代の教育もいろいろ自己の盲点を内に包み、ヒューマンイズムの危機は必ずしも去っていないと私は思う。そのことは現代における世界的状況を併せ考えると理解出来ると思う。それは現代の教育が純粋に科学的な人間観の上に立ち、これによって一切の哲学的又は宗教的人間観を排斥し、人間の道徳性・宗教性を否定するならば、そこには正義も平等も愛もなく、人格の尊嚴も人格の完成という教育目

的も意味のない飾り文句となり、いわゆる文化国家・平和国家の理想は喪失し、国民各自は真に考える力も感じる力も意志する力も持たない非人格的なものとなるであろう。かくて民主主義時代の教育の目的はいきなり現実の社会とその変化に適応し、立派にその中で生き抜くことの出来るいわゆる極めて、手軽な「社会人」・「平均人」を作ることであると考えている。この教育目的観は通俗的ないわゆる「明るい社会」「住みよい社会」を作るといふ社会観と同一のもので、人間の内面的な精神生活や道徳生活、人間の内なる人格主義的教育原理を欠如するために、「群集的人間」を作つて却つて真の民主主義と文化の没落を来すであろう。

#### (4) 平和の倫理的性格

日本は今度始めて敗戦の現実と直面し、その結果誠に深刻な道徳的頹廢という現象を体験している。しかし実はこのような道徳的頹廢は何も日本の今日の特異な出来事ではない。然もまた洋の東西を問わず凡そ大戦争が行われた後には勝つても負けてもその後に非常な道徳的混乱が起り、その頹廢が生ずることは世界共通の現象である。それは民族の精神の權威を根本から喪失させる。それが民族の心の支えを根本よりゆり動かして行き、その自信の喪失は植民地的感覺を呼び、ここに倫理的背徳を引き起すのである。このようにして始めの自信の昂揚が強いと、それが一旦崩れて破れ去つた後のショックも甚だ大きい。そのショックが反動として戦後の限りない道徳的頹廢を招来する。誠に戦争そのものこそこれらの道徳的頹廢の直接の最大の原因である。

今日の如き総力戦としての戦争が一旦敗れば無条件降伏を要求され、良きにつけ悪きにつけて旧秩序の權威は否認されてその一切が破られ、勝者は「勝てば官軍」式に戦争犯罪人裁判というものを一方的に強行するような戦争というものの後に生じた道徳的頹廢に於ては、何としても戦争そのものが最大の責任者であるといわざるを得ない。勿論日本民族の歴史や文化の中に幾多の欠陥はあるであろうが、しかしそれ以上に直接に戦争そのものが道徳の最大の敵であることが深く認識されるべきである。又科学の進歩は無限に続き、幾多の恐るべき文明の利器も創造され而も地球が相對的に狭められているいろいろの夢が科学の力によって実現される状態になって来ると、それと共に人類の危機もいよいよ深刻となって来る。もしここに為政者の良心が狂つた場合には一挙に世界人類の破滅に急行するような文明が発達する。このようにして地球上のいづかに居ろうとも現代の歴史の中に呼吸する人間は悉く平和をおびやかされ、人類の安全と幸福とは必ずしも約束されてはおられない。一度戦争ともなれば大量殺傷の恐るべき兵器が公然と使われて人類の生命とその文化とは一挙に滅亡するであろう。このような問題は國際問題であり、政治問題であるが、他面また明らかに人類の道徳問題でもある。このようにして平和の問題は現代世界における人類共通の最大の道徳問題となっているのである。

惟うに道徳問題は現代においては、単に個人の道徳的良心の問題ばかりではなく実に世界人類の運命に関する共同にして最大の問題となっているのである。この大きな問題にふれずに倫理道徳を単に個人の内面的な良心の問題のみに局限しているのは正しくない。それは人類共同の安全と幸福の保証に関する問題であり、平和の問題であり、世界史的問題であるといわねばならない。平和が一切のものの存立の絶対条件である限り、そこには絶

対的倫理性がなければならない。かくて倫理道德の問題は個人の正しい在り方から更には人類の正しい平和な在り方に関連して世界史的問題となっている。平和こそ現代における教育的人間像の究極的目標であるといわなければならない。このような状況の中において、社会倫理の拠点となるナショナリズムを人類の世界から無くして行く方が危機の緩和に役立つと考えられる。今日誠に根強いナショナリズムからその偏狭な面をなくして行くこと即ち、世界人類の一体観というものを自覚的にもたらすような方向へ向って行くことが現代の世界において人類倫理の確立のため大切なことである。このようにして平和な世界は人類にとって誠に幸福な世界である。人類倫理は人類愛に基づくものであるが、とにかく現代においては幸福は平和において究極するといわなければならない。

### (5) 主体的自覚

日本民族は敗戦の中から立って、今後の世界史の嵐の中であって立派に試練に耐え抜いて行き、進んで世界史の形成に貢献するためにはどうすればよいか。勿論そのためには世界史的自覚の立場に立って現代の危機を打開せねばならない。日本では今まで儒教道德がわれわれの生活を支配して来た。それが、そのまま今日又全面的に復活して現実の社会を規制して行くことは最早や出来ない。そうするとわれわれは如何なる方向に新しい道を開拓すべきであるか。これがわれわれの解決すべき課題である。歴史の中において絶えず苦しみ悩みそして常に新しい道を求める態度の中に進歩がある。一般に思想が身について世界観の根柢をもつことはほんとうの意味で主体的自覚に立つことである。自分で自分を把握して自分の足場を築いてゆくことである。その根本的自覚が日本の文化の中に欠けていたのではなかろうか。即ち、一貫した主体的自覚に欠けていたのである。実は倫理とか道德とかいうものは、その根本は常に絶えず歴史の現実と人間性とを見つめ、それを根本から革新し改善してゆこうとする能動的主体的態度の問題に関係があると思う。

西洋においては、その倫理の中心はその出発点からその長い歴史的伝統の中において常に自由の確立を中心問題として来ている。その自由の確立を種々の角度とか立場から何とかして具体的に確立しようとして苦しみ努力して来た。現代における実存主義の倫理観・宗教観も長い間のヨーロッパの伝統であったキリスト教的ヒューマニズムが最早や完全に行き詰ったという自覚から出発するものである。そして人間の真の自由、最後の自由を如何にして確立するかという自由の主体的確立がその眼目である。資本主義が過度に発達しすぎて機械が人間を奴隷化しつつある時代、一切が物質的な価値に換算されつつある時代、これに対抗して社会主義や国家主義や共産主義が日々に進出しつつある時代に徒らに理想主義を押し立てるのではなく、何よりも現実の中に自らを落してその底から新しく主体的な自由を確立してゆく道を開拓しようとするのである。倫理の具体的内容というものは確かに歴史的社会的の変化発展と共に変らざるを得ない。人間は歴史の中に在って課題を解決してゆく存在であって、倫理は人間に内在的な規定である限りたしかに倫理というものは可変的なものである。それにも拘わらずヨーロッパ思想特に倫理において自由の確立ということが終極の課題であった。倫理の徳目主義は第二次的問題である。この主体的自由への自覚が倫理確立への道であると思う。倫理道德の問題はあくまで良心の自由の問題である。外から規定するのではなくて、内から規定するその人の主体的自覚の問題である。

日本人の在来の道徳的世界観は教育勅語を中心として儒教道徳を内容としていたが、戦争に敗れて政治が変わると、かつての政治と結合するの故にもろくもその世界観は変わってしまった。こうして思想の拠り所の中心を失った日本は西洋におけるよりも激しく動揺した。このすべてが、破れた後には唯虚脱のみが残るのであって、このことが倫理の頽廢を惹き起すのである。西洋におけるキリスト教という地盤があってその上での倫理の頽廢とは様子が異なるのである。キリスト教の場合にはそれがいつでも現実の社会と実践的に結びついている。いわば神の国を地上に建設してキリスト教に示されたような神の愛を社会的に実現しようとして常に現実の生々しい社会に働きかけて、人間の倫理へのつながりを有っている。そして人間は人格的な自己の自覚において超越的な神と対決して行くところに社会的倫理の実践を有つのである。このように西洋においては宗教というものが現実の社会生活の根底の中にあるので、道徳教育というものが日本のような形で深刻な問題とはならないのである。ところが、日本においては神道とか仏教とかはそれぞれの立場において常に人間と人間との関係の規定である道徳と強く結びつくことは極めて弱いという欠点をもっている。それが一つの現実的な力として社会の中に浸透して民衆の現実的な力と転ずることが誠に弱いものである。従って、日本の過去及び今日に於て、西洋のキリスト教のように社会全体が大體これによって精神的に支持されるというような勢力を有つものがない。これが日本の弱点であって、道徳教育が非常な混乱を来しているのである。

倫理というものは出来上った一定の内容としては歴史が変わり、社会状況が変わるにつれて変化してゆくものである。忠とか孝とかいう固定の形式的な徳目は歴史の中においては、いづれ変化することは自ら明らかである。重要問題はその根本にある主体的自覚の問題である。この主体的自覚は単なる精神主義のものではなく、人間生活の物質的側面をも内に包んだ自覚であって、道学者風の自覚ではない。のびのびとしてものを考える力に立脚する自覚であって、外から抑圧されて動く自覚ではない。このようにして倫理とか道徳とかいうものは結局自主性に基づく幸福への道の自由な自覚の中に存するものであると私は考えたい。

このように考えて道徳教育の根本問題は道徳的主体性を創造させる働きの中に存すると考えられる。忠とか孝とかを外から規制して教え与えることではなくて、青年や児童の中にその段階的立場に応じて一人一人の心奥に自由を確立してゆく力を築いてゆくことである。そのことを離れて何か出来上った倫理を時代に迎合させて適当に適応させても、それは人生の生命となることは出来ない。自己の囚われない自由な立場から決断してゆく自覚的な働きの養成こそ重要な根本問題であると思う。倫理道徳の教育といえ、どうしても忠とか孝とかの徳目を立てて人間の外からの規制的原理を設定しておかないと何となく不安であるとして、人格が人格を手段とすることは何としても背徳であるといわなければならない。凡そ人間と人間との間に血の通う愛があるならば、それが倫理の中核となって人間関係を規定するものではなからうか。囚われない主体的自覚から態度決定をしてこそ、そこに決断が身につけており、従って自己自身の責任がそれに結びついている倫理的主体性を身につけることが現代の日本の道徳教育において急を要する根本問題ではなからうか。縦の道徳とか横の道徳とかの設定そのものに対する関心が問題ではなくて、それらを自己の問題として解決しようとする主体的な自覚が一切の問題なのである。この自覚

の中から今後の倫理道徳の方向も新しく創造されてゆくのではないだろうか。このようにして大きく日本そのものの主体性の確立、小にしては一人一人の人間の眞の自己が確立されるのではなくては道徳も宗教も本物にはならない。あくまで自己の責任において行為を実行する独立の意志と能力とを養って、個人を完成することが必要である。このようにして主体的自覚にまで自己を涵養することなくしては、民主主義も道徳教育も本物にはならないと思う。

## (6) 道徳教育の根源

道徳教育というものは普通には孝行の心を養うとか、愛国心を養うとか、というようなことが主な内容であるかのように考えられているが、それも勿論道徳教育の中に含まれているが、然し最も根源的なことは「人間として生きてゆくことには大きな意義があるのだ」「人間として生きてゆくということは良いことなのだ」「人間というものはどこかでお互いに認められ合って然るべきものだ」即ち「生きるということを深く肯定することが出来るようになる」ということが「道徳的になるということ」なのである。そうして一番大切なことは人間というものを大切にするようにさせてゆくことが、道徳教育の最も重要な根源の性格である。一体人間とは何であるか。古来哲学的人間学の問題としていろいろ探求されているにも拘わらずなおもハッキリ解答出来ないほどに困難なものである。ただ動物と一線を劃することは明瞭であるが、それも唯物論者の立場においては「人間も動物なり」と定義するかもわからない。普通人間は「人格」とか「自由」とかいはわれているが、その実体的内容の解明は誠に困難なことである。然し、人間が単なる動物ではなくて、人間としてそこに存在する事実として大事なものをもっている、ということに気がつき、又そのようなものとして相互に取扱ってゆくところに道徳教育の重要な根源があると思われる。

このような立場がいわばヒューマニズムであって、このヒューマニズムを自覚させ実行させることが即ち道徳教育である。人間はいろいろの方向への可能性を有する。人間は自分の生き方如何によっては何にでもなれる。そこに人間の覚悟とか意志とか決断とかが、重要な意味を発揮するのである。そこに人間の尊いところがある。従って人間が尊いとは人間が何にでもなれるということで、悪くすれば落伍も敢てする危険性を有する。この可能性としての人間は尊いものをもっているし、人間として生きることは生きがいがあるということに気づかせることが先づ生きて行くことの第一条件であり、又道徳教育というものがなされる場合の根本的条件である。

この「生きがい」の心が一定の方向をとってゆくところにそれぞれ「理想的人間像」が構想されて来るのである。

### (a) 生命哲学の立場

近代文明は機械文明であってその支配により人間が機械のようにされている。人間のちかの生命が拘束され、無視されていることに対する抗議として現われて来たものである。従って「人格の尊重」の前に「生命の尊重」を主張する。そして古い道徳教育が欲望とか衝動とか本能とかを否定したり制限したりするのに対して、この立場の道徳観は「生」の存在を根本から正しく生かすことになる。始めからいとも簡単に人間の欲望を否定す



る道德ではなくて、欲望を生かす道を教える。ここに「生」のよろこびを発見して幸福と  
かしあわせとかを把握するものである。

### (b) マルクスの立場

マルクス主義も近代の資本主義の支配の下においては、人間が品物となっていることに  
対する抗議として存在する。人間の幸・不幸の源泉はどこにあるかを調べ、運命に任さな  
いで科学的に不幸の病源を発見して、人間の力によってこの不幸を脱却することを教える  
ものである。

### (c) 実存主義

やはり近代に対する抗議として起ったもので、世界の中に投げ込まれている自己を救出  
して個人の自由に基づく尊厳を主張して人間の人格に対する尊敬を現わす。かくて決断に  
よる自由への道を求めるのが実存哲学の特色である。然し絶対者の前においては人間は一  
応有限であると見る。

以上三つの人間的理想像について考えたのであるが、いづれもこのようにして、幸福と  
かしあわせを自ら主体的に求める態度の中に人間的理想像を求め、又そのことはそのまま  
道德の問題と結びつくのである。

## (7) む す び

### (道德教育の目標とその周辺)

現在われわれが道德教育を考える場合において一番大きな問題は何といってもその具体  
的目標とか指標とかいうものがはっきりしておらないということであると思う。道德教育、  
道德教育と大きく叫んでいるが、その具体的指標というものがはっきりしておらない所に  
現在の道德教育の混乱の第一歩があるように思う。かって終戦前の日本の教育は現在から  
見ればいろいろ批判される余地は大いにあるが、その道德教育の目標というものが実には  
っきりして、それはそれなりにいわゆる滅私奉公、忠君愛國、というはっきりした目  
標をもっていた。現在道德教育をする場合、どんな道德教育をするか。過去において自明  
であったものが現在混乱状態にある。従って現在においては何か一つ、新しい意味の道德  
的指標というものが必要であると思う。その道德的指標を幸福とかしあわせとかの中に於  
て体系付けられるべきものであると思う。過去の道德教育といえは「禁止」と「命令」の  
領域以上には体系付けられておらない。現在においては人間は人間以外の立場から観られ  
てはならないのであって、あくまで人間という立場において洞察されなければならないと  
思う。そのことは愛の立場に止揚されるものであって、やがて道德は宗教の立場で純化さ  
れ、深められるべきものであると思う。ところが、西洋においてはキリスト教は、その教  
義的個性からの理由もあって、現実の人間道德と密接な関係をもっているが、神道でも仏  
教でも現実の人間道德と生々しい関係の中に立っておらない。そのことはそれらの教義的  
な或る宿命から来る要素も大いにあるが、今後大いに反省して努力すべき課題があるよう  
に思う。若し日本民族が歴史の中において、全体としてその精神が現実的に鍛えられてひ  
きしめられて来たものならば、終戦直後の精神的空白もあのようにひどくはなかるうと思

う。大きな立場で日本文化を包む精神、日本民族を世界史的に支える精神を自己の課題とするものが欠けていたことは不幸であったと思う。仏教は世界的宗教でありながらそのような課題を果し得なかったことは反省すべきことである。仏教の立場からのみならず日本民族自体の立場から反省すべきことであると思う。

現在において倫理を新しく考える場合、人間生活の経済的側面と切り離して考えては、倫理は生々しい迫力を欠くことになる。日本の社会は明治以降の大きな発展にも拘わらず、ついに経済活動が道徳的に是認されるということがなかったのである。日本の国を富ませるためというような名目を掲げて、明治以降のわが国の経済活動は推進されて来たのであるが、しかし道徳的な世界においては経済活動はついに是認されるということとはなかったのである。日本では経済と道徳とが背を向け合っている。経済と倫理との背反の関係は西洋にもあることではあるが、日本の場合は封建的な経済観が克服されなかったために更に深刻な問題をもっていると思う。戦後の経済的な混乱とそれに伴う社会的な混乱はひどいものがあったが、とにかく戦後の経済的混乱は他の要因もあって、倫理そのものに対する不信を大きくした。倫理の無力を体験し、倫理の権威が否定される体験をした後には、その回復は深刻である。このようにして経済的混乱、経済的虚脱、経済的懐疑に追いやられた体験の中からの道徳教育は余程の困難がある。

単なる徳目を並べただけでは解決出来ないと思う。倫理が健康に成長するためにはそれを支える経済的・社会的な土台が必要であると思う。われわれは経済生活なくして生活出来ない。人間生活の実際において多くの部分を占めている経済活動が倫理的に積極的に支持されないことになると、その社会においては倫理的感觉は現実化しない。倫理はゆがめられ且つ社会の中に根を降さない。従って倫理は現実の社会生活から遊離して行く。なるほど倫理は個人の良心の自由の問題ではあるが、その客観的土台がないと現実的力とならないことは留意すべきことである。倫理は家庭の内部の問題、人間の心の内部の問題、にのみ転落してはいけない。日本の社会においては経済的な関係の中にも人間が人間として取扱われない、人間の生活が人間の生活として是認されない、ということから生活上の困窮が見過されたり、不幸な事態が何の感動もなく見過されていく。こういうことが経済の変化によって非常に大きく増加していくのである。

従って経済生活によってわれわれの生活が豊かになり、その生活が前進するためには、人間が人間として経済社会の中においても取扱われることが必要である。かくて倫理的な在り方と経済的な在り方とのいわば弁証法的な関係を是認して「明るい社会」へと上昇する必要があるのである。

道徳教育ということが次第に声高らかに叫ばれるようになると、そこには昔ながらの・・・・ 聯教育とか徳目主義というようなものが謳歌される可能性の危険が強いが、現代の歴史的な社会情勢の中において、経済的な諸関係や社会的な諸関係から切り離された所の非歴史的な立場において徳目を教えるならば、結局倫理自体の自殺行為となるであろう。それ故にわれわれは、現代の歴史的な社会的な経済的な実体に即しながら、それらをどのように克服していくか、ということを考えないで倫理を教えるということは、極めて非効果的どころか大きな危険と誤りを犯すことになることを深く反省しなければならないと思う。